

郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2014.1 NO.79

▶トピックス

- ・特別展の開催
- ・研修バス旅行の実施
- ・県立記録資料館の講演会
- ・国分寺模型の寄贈

▶研究ノート

津山城内の正月儀式

梶村明慶

▶お知らせ

- ・江戸一目図の公開について
- ・新規展示資料のご紹介



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

(表紙写真 美作国分寺復元模型)

特別展

土の棺に眠る

開催

～美作の陶棺～

会期:10月19日～12月1日



今年度の特別展は、美作国建国1300年を記念した企画で、古墳時代後期の美作地域を特徴づける遺物である陶棺を多数展示しました。全国で出土している陶棺のうち、美作地域からの出土は半数を超えています。

本展では、美作地域から出土した陶棺を中心に、県内をはじめ鳥取市から借用した陶棺も展示し、陶棺の推移を把握できるものとなりました。大きな陶棺が展示室を埋め尽くしている光景は、なかなか見られるものではなく、入館者の皆さま方にもご満足いただけたのではないのでしょうか。

陶棺のうちの一部は、職員自ら運搬しました。教育委員会文化課全体に協力を求め、男性職員多数で作業に当たりましたが、各陶棺は4分割されているものの、その重量は相当なものでした。

本展のほかに、陶棺に関連する事業が開催されています。勝北陶芸の里では、水原古墳から出土した陶棺の実寸大での復元が行われました。備前焼作家の花岡勉さんをはじめとする有志の方々が、様々な困難の



六人がかりでの運搬作業



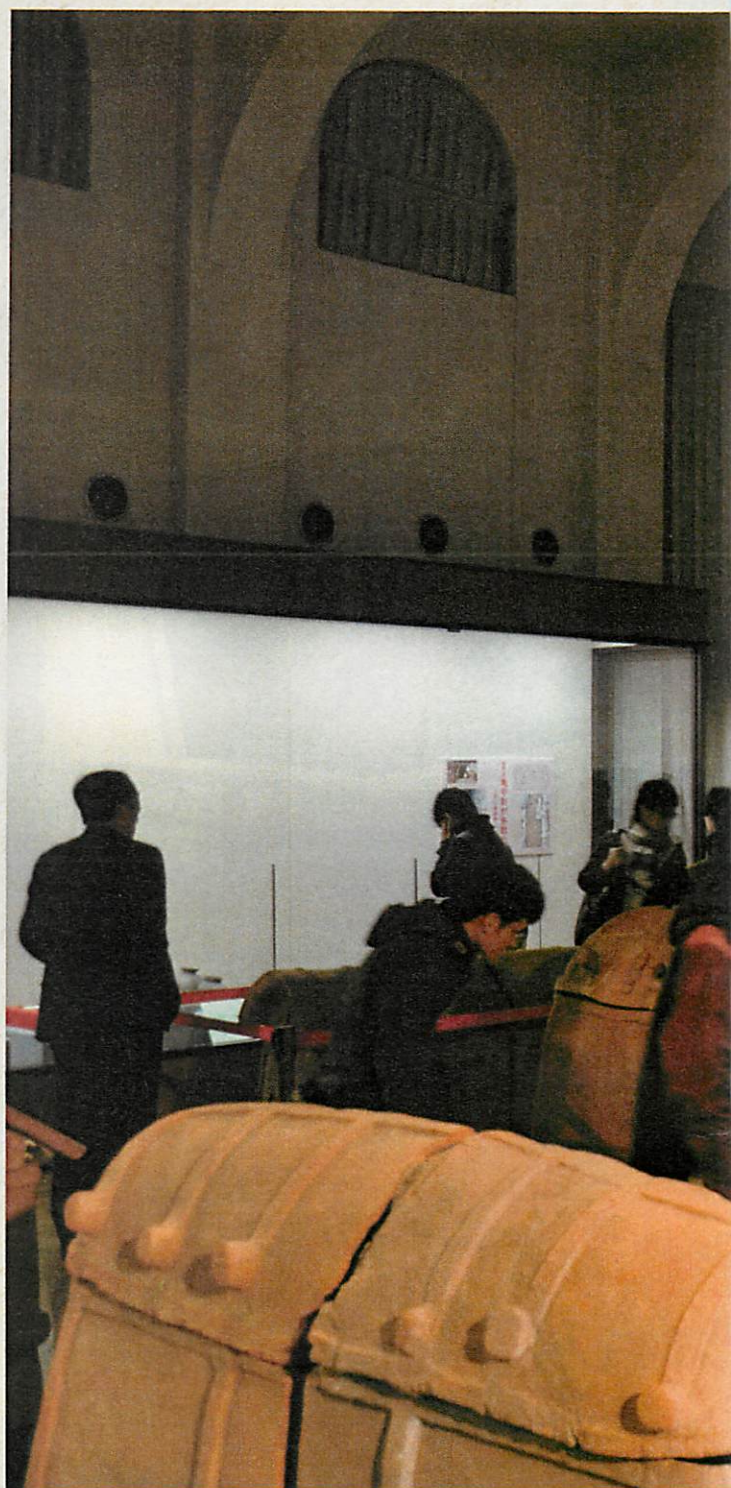
シンポジウム会場でお披露目された復元陶棺



シンポジウム「陶棺の謎に迫る」の様子

聞き入っていました。
展示資料の借用をはじめ、本展ならびに関連事業の開催にご協力いただいた関係機関・個人の皆さま方、そして本展をご覧いただいた多くの入館者の皆さま方に、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

岡山県教育委員会文化財課の尾上元規さんをコーディネーターとしたパネルディスカッションでは、陶棺普及の理由や被葬者について意見が交わされ、約200人の来場者が熱心に



末に10月半ばに完成させ、10月27日のシンポジウム会場でお披露目された後、特別展終了まで当館1階に展示しました。

10月27日のシンポジウムは、「陶棺の謎に迫る」というテーマで勝北文化センターにて開かれました。岡山大学大学院准教授の光本順さん、奈良県立橿原考古学研究所の絹島歩さんと、今回の特別展をメインで担当した津山弥生の里文化財センターの豊島雪絵さんがそれぞれ講演した後、

郡山宿本陣の外観



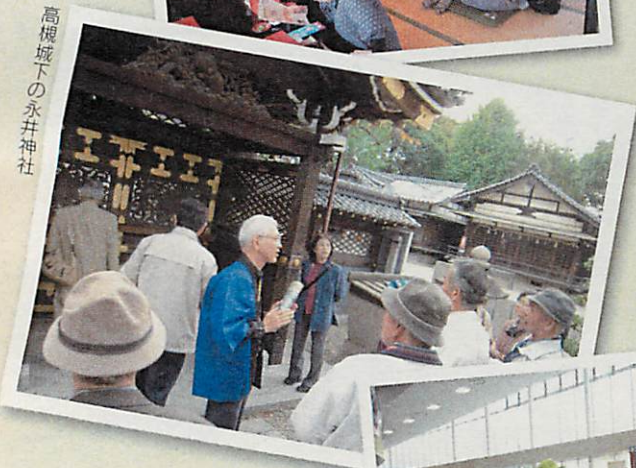
郡山宿本陣の内部



昼食・枚方宿鍵屋



高槻城下の永井神社



今城塚古代歴史館



今城塚古墳



大阪方面への研修バス旅行 第100回文化財めぐり

当館のオープンから満25年が経過し、昭和63年11月に初めて実施した文化財めぐりも、ついに100回目を迎えることになりました。その記念すべき節目として、「淀川沿いの街道筋の史跡探訪」と題して日帰りの研修バス旅行を企画し、秋晴れに恵まれた11月2日に、大阪府茨木市・枚方市・高槻市方面の史跡をめぐるしました。

て名高い西国街道の郡山宿本陣、次に京街道の宿場や淀川水運の中心地など水陸交通の要衝として栄えた枚方宿の船待ち宿を整備した鍵屋資料館、そしてキリシタン大名高山右近ゆかりの地で、江戸時代には譜代大名永井氏の居城であった高槻城跡と高槻市しろあと歴史館、最後に淀川流域最大の前方後円墳で、継体天皇の真の陵墓と考えられる今城塚古墳と今城塚

古代歴史館、以上の4か所でした。それぞれの見学先では、現地の方に案内・ご説明をお願いしました。参加者の皆さんも熱心に耳を傾けられ、歴史散策を十分に満喫していただけました。また、昼食は鍵屋資料館で取りましたが、趣のある大広間での食事

にすべての旅程を終えて、ほぼ予定どりの時間帯に津山へ帰り着きました。現地でご案内くださった方々、そして参加者の皆さんに、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

当館では、友の会会員をはじめ歴史に関心のある市民の皆さんが、興味を持って楽しんでいただける企画を今後も工夫してまいりますので、どうぞご期待ください。

県立記録資料館に講演会場を提供

11月7日、県立記録資料館主催の講演会に、当館の研修室を会場として提供しました。

この講演会は、同資料館が10月22日～11月24日に開催した企画展「岡山の南北水運」の関連事業で、同資料館の武本淳さんが「岡山の南北水運く吉井川を中心に」と題して講演されました。この企画展には、高瀬舟に関する津山藩の掟や舟株改めの記録など、当館の所蔵資料も貸し出していきます。

講演会には約30人が来場し、興味深そうに聴き入っていました。



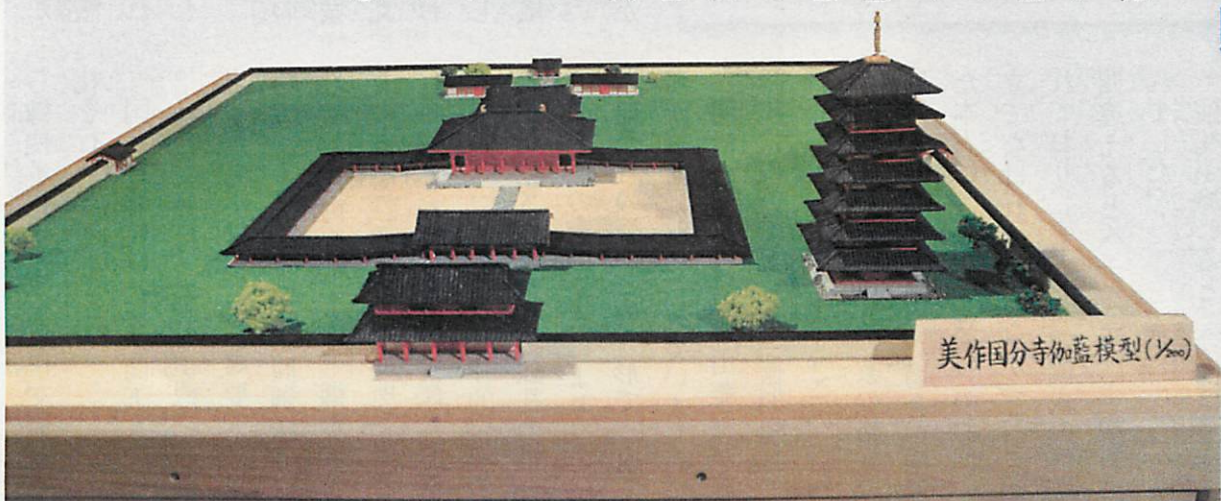
講演会の様子

国分寺模型の寄贈

美作国建国1300年を記念して津山工業高校の生徒が制作した美作国分寺の模型が、当館に寄贈されました。

国分寺の伽藍を1/200のスケールで再現したこの模型は、同校建築科の山本豊先生の指導のもと、平成24年度の3年生男子生徒4人、25年度の3年生女子生徒4人が模型本体を、そして建築研究部員の6人が台座を、課題研究として制作したものです。

細部にいたるまで、とても精巧に再現された力作ですので、ご来館の際にはぜひお忘れなくご覧ください。



美作国分寺伽藍模型(1/200)

津山城内の正月儀式

—津山藩国元日記をひもといて—

梶村 明慶

【はじめに】

江戸時代、津山城の本丸御殿では、一年を通して年中行事などの儀式が行われていました。その当時の儀式は、明治維新後の津山藩消滅により、現在では実際の様子を見ることはできません。しかし、当時の記録を見ていくことで、儀式の様子をうかがい知ることができます。

今回は、1月号ということで、松平家の時代の正月元旦から三が日の藩主と家臣・領民との御目見えの様子をご紹介します。当時、参勤交代により、藩主が江戸にいる正月と津山にいる正月とがあります。藩主が津山にいた弘化2年（1845・8代藩主斉民）の国元日記の記録を基に、御目見えの様子を確認します。

【元旦の儀式】

藩主との御目見えには、家臣の家の格式により、藩主と一対一で御目見えをする「独礼」と、決められた格式の家臣が群居して集団で藩主と

御目見えを行う方法、そして藩主が歩きながら御目見えをする「御通懸御目見」の三種類があり、それぞれの格式で御目見えをする場所も違っていました。

まず元旦は、御徒格以上で有役の者は「五ツ時」(午前8時頃)に登城します。そして最初に、藩主は本丸御殿の御座之間に座り、二之間において家老、御年寄が藩主と独礼をします。それが終わると、藩主は鳳凰之間に移動します。そして、向かいの紫陽花之間において、御奏者番か

ら御使番格までの家臣が藩主と独礼を行います。

国元日記には「二ノ間下ノ二畳目ニ御独礼三畳目ニ御盃頂戴之返盃有之 永見小刑部 安藤要人(以下略)」、また「紫陽花之間御縁側壹畳目ニ御独礼御流被下之 御奏者番右有役御小性頭格迄 同所二畳目ニ御右同断 大目付右同小従人頭格迄(以下略)」などと、具体的に座る位置が記載されており、独礼の場合はその家臣の家の格式により「〇〇から何畳目の畳」という形で、座る場所が厳密に決められていました。

■津山藩士の格式・役職表(『津山市史』第4巻より転載)

格 式	人数	役 職	格 式	人数	役 職
家老	5	城 代	組付以上格	38	大坂歳奉行・御茶道・小勤者・座敷奉行・料理人・次拵筆・台所目付
年中寄	9	添 城 代	小 従 人	40	小勤者・次拵筆・帳付料理人・御櫛上・大工棟梁・大納戸・紙納戸坊主頭・絵師・火之番十分一役・荒物方・勘定方・勝手方
頭	3	奏 者	大 役 人	127	御歳方・大坂歳役・鉄砲張・台師・金具師・矢師・細工方・紙漉・帳付・皿村煙硝蔵番・御庭方・中間頭・小桁船改・薪奉行・御馬爪髪役・御金番・膳方・膳方・春屋・塩干物方・荒物方・酒方・掃除奉行・櫛方・進物方・作事方・作事目付・台所目付・座敷番・勘定方
頭	6	番 頭	小 役 人	36	歩 行 目 付 ・ 平 歩 行
頭	2	性 頭	坊 主	33	御前坊主・家老坊主・小納戸坊主・総坊主
頭	11	目 付 頭	計	628	
頭	5	中 頭	御手廻り	199	草履取・長刀持・大道具物・傘持・中間小頭・中間部屋頭・中間
頭	2	小 頭	御 国 方	139	足軽・鷹の者・杖突・中間・御殿方中間(秤目)・太鼓打中間
頭	3	小 頭	足 軽 ・ 中 間	338	
頭	19	物 頭	計		
分	3	寄 合 番	御手廻り	199	草履取・長刀持・大道具物・傘持・中間小頭・中間部屋頭・中間
分	29	使 番	御 国 方	139	足軽・鷹の者・杖突・中間・御殿方中間(秤目)・太鼓打中間
外	15	番 外 頭	足 軽 ・ 中 間	338	
外	20	番 外	計		
組	33	小 性 組	御手廻り	199	草履取・長刀持・大道具物・傘持・中間小頭・中間部屋頭・中間
組	79	中 央 組	御 国 方	139	足軽・鷹の者・杖突・中間・御殿方中間(秤目)・太鼓打中間
付	110	大 番 組	足 軽 ・ 中 間	338	
付			計		

明治の初めに旧津山藩士が藩政時代について記した「懐旧随筆」という書物があります。この書物には、独礼の際、自分の家の格式の畳以外に間違つて座った場合、間違えた本人は「差扣」(謹慎)のお伺いを立てなければならなかったと記されており、藩主の前で儀式の作法を間違えるとペナルティーが科せられました。

独礼が終わると、今度は集団での御目見えが行われます。藩主は鳳凰之間から紫陽花之間へ移動します。そして、紫陽花之間の南にある松之

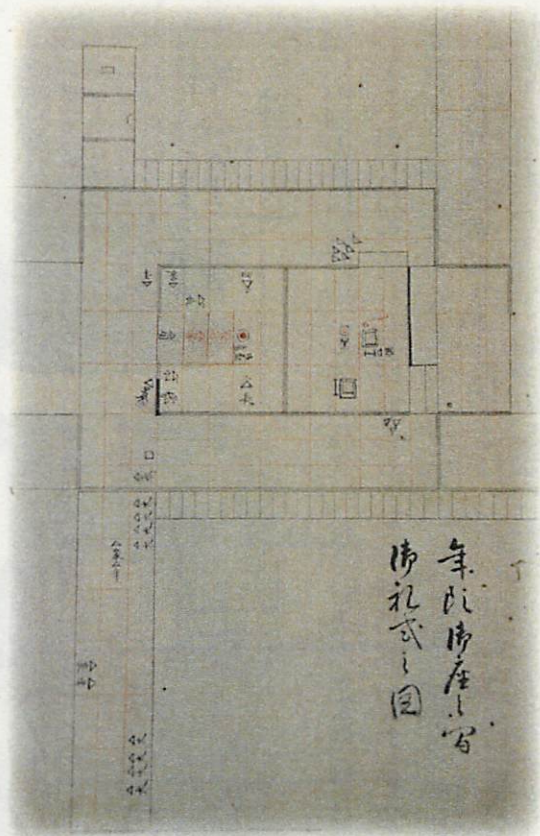
間に、番外から小従人組までが集まり御目見えを行います。その次は、次右筆から大役人までが松之間と芥子之間の間にある縁座敷にて藩主との御目見えを行います。

それが済むと、藩主は御座所の御座之間に帰っていくのですが、帰る道すがら、月並小役人から御徒目付までが芥子之間で、御徒格が鳳凰之間の後ろの廊下で、「御通懸御目見」を受けました。

【正月2日と3日】

元旦の御目見えは、役職についている「有役」の家臣が主な対象でしたが、2日には役をもらっていない「無役」の家臣が主な御目見えの対象になってきます。御目見えの方法は元旦と同じような要領と手順で、それぞれの家の格式により藩主と御目見えを行いました。

そして、3日の御目見えの対象は「隠居と15歳以下の者」となっていました。これも、元旦・2日とほぼ同じような要領で「大役人」までが藩主との御目見えを行いました。また、3日には家臣以外にも、城下町からは大年寄や札元などの町役人



■諸々御礼式之図(部分)
嘉永2年(1849)作成。年中行事の手順を記した図。この頁は御座之間での御目見えの手順を記したもので、それぞれの座る量の場所まで記されている。

や町医師、村からは大庄屋などの人々が、芥子之間の御入側から本丸御殿通用口の「中之口」、鳳凰之間の後ろ廊下にかけて集まり、藩主の「御通懸御目見」を受けました。

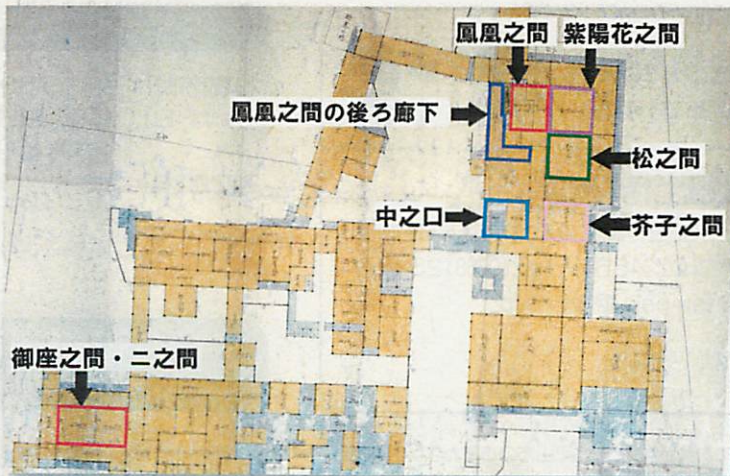
しかし、この年の記録では、2日・3日の御座之間の御目見えは、該当者が「一同不参」で名前だけの披露で終わり、3日の鳳凰の間での御目見えについても、「十五歳以下之御目見済候者当時無之」と該当者がいなかったたので、行われなかったようです。

【おわりに】

今回は、国元日記の弘化2年の記述を基に、正月の儀式の様子を紹介しました。この年は、藩主が津山にいる年でしたが、藩主がいない年も正月の儀式は行われませんでした。この場合では、家老、御奏者番などが正月の祝いの挨拶を受けて、江戸の藩主に伝えるという形をとりますが、この際においても、家臣の家の格式により、挨拶をする場所や方法が決められていたようです。

当時は「士農工商」と言われるように身分制の社会でしたが、同じ武士である津山藩の家臣たちの

中でも、それぞれの家の格式により待遇がはっきりと区別されていたことが、儀式を通じてかいま見えます。



■津山城之図(部分)
文化6年(1809)に火災で焼失した本丸御殿の文化7年再建後の図面



平成26年度の 江戸二目凶屏風の公開について

春季…4月5日(土)～5月6日(火)
 秋季…特別展開催後、11月～12月頃の1か月間

東京スカイツリーに複製が設置されて以来、注目度が高まっている当館の江戸二目凶屏風ですが、新年度4月以降の実物公開は右記のとおりです。

東京スカイツリーに複製が設置されて以来、注目度が高まっている当館の江戸二目凶屏風ですが、新年度4月以降の実物公開は右記のとおりです。

県指定文化財であるため、年間の公開期間が2か月以内に制限されていますが、26年度中は他館への貸出がありませんので、公開期間のすべてを当館で利用できる予定です。

新規の展示資料のご紹介

特別展終了後の展示替え以降、最近の寄贈資料の中から新たに以下の資料を展示しています。今後も、常設展示の展示替えやミニ企画展の開催などを随時行いますので、どうぞご期待ください。

○黒塗足軽具足

くろぬりあしがるぐそく

津山城の城附武具の一つと言われ、紐の切れた箇所も見られますが、まずまず旧態をとどめています。城附武具とは、文字どおり城に付属する武具のことです。城主が交代



してもそのまま継続して城に残されるものを指します。享保2年(1717)の書類によると、津山城の城附武具としては、黒塗足軽具足が300領あったといわれています。

入館のご案内

[開館時間]	午前 9:00～午後 5:00
[休 館 日]	毎週月曜日・祝日の翌日 年末年始(12月27日～1月4日)・その他
[入 館 料]	一 般 200円 (30人以上の団体の場合 160円) 高校・大学生 150円 (30人以上の団体の場合 120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
 市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。



郷土博物館だより「つはく」
 No.79 平成26年1月1日

津博 TSUJIBOKU

[編集・発行] 津山郷土博物館
 〒708-0022 岡山県津山市山下92
 Tel(0868)22-4567 Fax(0868)23-9874
 E-mail:tsu-haku@tv.t.ne.jp

[印 刷] 株式会社 美成